

私の戦争体験

朝倉郡三輪町 江藤 愛子

昭和17年7月、大分日赤より召集令状届く。直ちに小倉陸軍病院勤務。18年9月再び戦地勤務の命と共に、行き先も極秘のままに302班という救護班の一員として広島大竹港を後にしました。

やっと着いた所がマニラ港でした。最初の勤務地は海拔1500mといわれるバギオ市の第74兵站病院でした。その当時バギオは内地の軽井沢といわれるだけあって日本の初夏を思わせ、山にはワラビが一杯あり、松林が青々としていました。休日町に外出すると、バスに『日本語で乗せて下さいといえる人はタダで乗せて上げます』と書いてあり、山の住人達がにこにこして乗ってすべてが日本色豊かだった事を思い出します。

この静かな町のどこに戦争があるのかと思うくらい平和に見えました。ところがマニラ上陸1年になろうとした時、マニラ12陸軍病院第3分院に転属命令が下り、マニラ勤務となりました。丸1年目の21日の午前8時頃、突然飛行機の爆音が聞こえて来たので患者さんと思わず空を見上げると、何百機という飛行機の大編隊でした。私達はそれまで日本の飛行機を数える程しか見ていませんでしたので、思わず『日本にもまだこんなに飛行機があったのか』と喜んでいましたところ、その日は日本軍の高射砲演習最後の日だったらしく、アメリカ軍はその日を利用してマニラ大空襲にやって来たのです。

それ以来毎日のようにマニラは空襲され、病院の中にも高射砲の破片が飛んでくるようになり、市内の各所にある日本軍の飛行場は朝から黒煙を上げていました。この頃から入院患者の中でも軽症の飛行兵、並びに飛行整備兵の人は強制退院をさせられる程状況が悪くなっていました。中でも忘れられないのは16才という少年兵の事です。即ち『人間魚雷』、敵の陣地に爆弾をかかえて死に行くのだと聞いて思わず胸のつまる思いでした。マニラ市内もボタン一つ押せばたちまち火の海になる、とのことでした。19年12月26日に看護婦全員に帰還命令が出ましたが、直ぐに、看護婦は足手まといにはならぬとって取り消されました。軍が服地を持って来て、「これでモンペを作り、いそいで移動準備をせよ」との命令を受け、モンペを作りました。兵隊さんの略帽の周囲に日おいをつけ、足にはキャハンをつけた看護婦の姿をアメリカ軍はどう感じたのか、『日本軍には女の兵隊がいる』と言っていたそうです。

マニラの空襲がひどくなるにつれ、そこにもおれなくなり、軽症患者と共に再びバギオにむかいました。20年1月にはバギオにも大空襲があり、あまり広くないバギオ市も次々火の海となり、赤十字の標識も何の役にも立たず、病院が爆撃され出しました。これは陸軍の主力がバギオにあったからだと聞きました。

私共の病院が初めて大空襲を受けたのは20年1月23日のことです。私は診察の準備をして病院の近くの笹やぶに行った時、急に飛行機の爆音がするので思わず上を見上げると、コン

ソリB.2 4が4機、胴体をぱっくり開けて低空で私達の病院の方に来ているように見えました。私は「軍医殿、今日は絶対壕に入りましょ」と言って入ると同時に、「ドカン、ドカン」と次から次に爆弾を落とす音、豆を煎る様な機銃掃射の音が2時間以上も続きました。やっと飛行機が去ったので壕から出て見ると、竹やぶのあちこちから「軍医殿」、「衛生兵殿」、「看護婦さん」、悲愴な声がきこえて来ました。私が声のする方に向けよって見ると、2時間程の一瞬の間に片手のない人、足のない人、血だらけになって動けずにいる人、爆風のため誰が誰だか分からぬように亡くなっている人達を夜おそくまで収容しました。亡くなった人達の胸にかけている身分証明書をとって身元確認をしました。

日夜、戦争が激しくて簡単に埋葬するのが精一杯でした。この頃からバギオの空襲は激しく、診断治療もできません。早朝に壕の患者さんを見廻り、昼間は敵の飛行機が低空で病院の屋根すれすれに飛んでいますので動くことができません。食事等も既に乏しく、一人当たり一日50g、おにぎりにして小さいのが1個、それも夜中の1時頃しか食べることができません。明るいうちに煙を出せばすぐ爆撃されます。全員夜中の1時頃配給があるだけでしたので、担架運び等はやっとのことでした。勤務も夜が殆どで、爆撃のため電気は勿論点灯されず、こわれた板壁をはいで照明代わりにしておりました。診察、治療、注射等は全部夜でした。昼は一日敵の飛行機に追われ、夜は頭の上をすれすれに音たて、走るがごとく通る砲弾のおそろしさは今でも忘れられません。この頃から私達の宿舎は谷間の壕の中でした。

食事米の粒を数える方が早いようなおじやでした。3月23日の夜、誰かが「今ゲリラから無電が入って『明日は將軍山病院の近くの山から病院一帯を焼野が原にする』ということです」と私達の宿舎に知らせがありました。いよいよ死ぬ時がきたのかと覚悟をしながらも、私は塩手さんに「コックリさんと呼んで聞いてよ」といって頼みました。ワラをも握む思いとはこのような時をいうのでしょうか。折角お願いしたのにコックリさんは出ませんでした。仕方がないので婦長殿や皆と「どこで死んでも大分班として笑われないようにしよう」と話し合い、下着を着替え、貴重品のみ雑嚢にいれ、今迄大切に持っていた恩賜の煙草も患者さんにあげました。その日は焼野が原にはなりませんでしたが、案の定宿舎は爆撃され、大阪班の人が亡くなりました。私達が身も凍る思いして壕の中で数えた直撃弾の数65発、落ちるたびに生きた心地がしませんでした。次のような事が聞こえて来ました。『山下大将の命令によって近いうちに陸海軍による総攻撃があり、日本は必ず勝つ』ということです。即ち『3月10日の陸軍記念日か5月27日の海軍記念日を期してきっとある』と、これを殆ど日本人全員が信じていましたので、空腹も爆撃の恐ろしさも堪えしのべたのです。病室も爆弾を落とされ天井は穴だらけで、重症者を収容するのに大変でした。また反対に雨が降ると敵機が来ないのでほっとしたりもしました。

私達は『今日こそは死ぬかも』のくり返しの毎日でした。この頃は内服薬も注射も殆どなくて患者さんは可哀相でした。夕方あちこちの患者さんのテントから手榴弾による自爆死される音がきこえ痛ましく感じました。あの当時病氣の人は自らの手で死を選ぶより他に道がなかつ

たのです。バギオにも「敵の戦車が2km手前まで近づいて来たので直ちに移動せよ」との命により、真暗な夜の山道を軽症の患者さんと逃げました。

足元を気をつけよ、地雷が爆発するかわからん、またいつゲリラが出ないと限らん、注意せよと誘導されつつ行く病院の陣地は野宿ばかりでした。

6月12日山口少佐殿より看護婦に対し、「軍の命により今日からは食料の配給停止、自分で生きられる者だけ生きて行け」と訓示があり、食糧の代わりに手榴弾2個渡されました。その代わり救護班の任務も解除され、期待していた山下大将の命令、即ち総攻撃の沙汰も評判だけできかれなくなり、最後の集結地に向かって誰もが歩きました。後1週間も終戦がおそければ比島玉砕の地と決まっていたとか?!。

二度と悲惨な戦争のなきことを祈ります。

